# 絶望の向こうに希望を

片岡 龍

## 日々の幸せ 地道に回復

自転車で出かけた被災地で、文字通り言葉を失った。今年三月。わたしの住む仙台市内の大学宿舎も震災で被害を受けたが、「被災地の痛みを共有したい」と韓国からわざわざ戻ってきた留学生のソン・チス（宣芝秀）さんとともに出かけた海岸近くの同市荒浜地区や宮城県石巻市には、黙示録が伝える世界の終末のような光景が広がっていた。

わたしたちにできることは何か。そのときすぐ、韓国の写真家イ・ビョンヨン（李秉用）さんの顔が思い浮かんだ。エチオピアをはじめ世界各地に足を運び、圧倒的な貧困と生命の危機の中でも喜びと希望を失わずに生きる人々を写してきた写真家。写真よりも人間を大事にする写真家。イさんに「東北」の痛みを世界に伝えてもらいたかった。

余震のなお続く四月、イさんは仙台に来た。それから三週間、ソンさんとわたしとの三人で、沿岸各地の避難所に寝泊まりしながら被災地の人々と生活をともにすることとなった。

「玉子さん、いつか一緒に花見に出かけましょう」 イ・ビョンヨンさん撮影

朝から晩まで「瓦礫」の中を歩き回ると、心に何本もの矢が刺さったような状態になる。しかし、人間がいる限り、そこには必ず喜びと希望の芽がある。イさんの眼はそこに向かった。

避難所になっていたある小学校で、八十四歳の玉子おばあさんは、疲れた表情で横になっていた。イさんは同じ年で亡くなった自分の母親を思い出し、切々と語りかける。気がつくと玉子おばあさんが、イさんの手をとり、「わたしのことを日本のオモニ（お母さん）と思いなさい」と励ましていた。

イさんは、そのまま玉子おばあさんの手を引き、廊下に出て運動を始めた。それにつられて、中風を病む男性が奥さんの手に引かれて歩く練習をするなど、多くの人々が一緒に体を動かしはじめていた。

「絶望の中に希望を切り開いていく」、そんな向き合い方を、これから二十年、三十年、息長く続けていかなければと誓った。

津波と原発事故の影響に、これから長くあえぐ「東北」。その復興には「東北」の文化や風土を深く知らなければならない。芸能の宝庫である東北の「鎮魂」は、「たましずめ」でなく、死者の悲しみ、苦しみに共感する「たまふるい」である。

被害の少なかった東北内陸部も、沿岸部と痛みを共有している。わたしも沿岸部と山間部の助け合いの例を多く目にした。同県気仙沼市の大谷海岸の集落は、十五年前から山側の集落と御輿を通した交流を行ってきた。そのため、物資の提供や避難所の運営協力がスムーズに行われ、被災の翌日から温かいご飯とみそ汁を出すことができたという。この夏も、多くの祭りが、絶望的な状態の続く被災地で、さまざまな助け合いのもとに行われた。

もちろん、こうした東北内部の「互助」とともに、日本国内はもちろん世界各地からの「共助」がある。特に震災の痛みを共有する神戸の方々が、たくさんボランティアに来ている。十一月まで開かれている「神戸ビエンナーレ」の神戸ハーバーランド・ファミリオ会場でわたしは、そうした人たちの活動を、東北からの感謝をこめてイさんの写真とともに紹介している。

今年は、一八九一年十月二十八日に濃尾地震が発生して百二十年。全壊家屋十四万戸以上、死者七千人以上、明治維新後の日本がはじめて経験した巨大地震だった。その痛みを思い起こし、東北や日本、世界各地の痛みとともに、もう一度自分たちの文化を自分たちで紡いでいく運動の輪を拡げていくときではないか。復興や振興に名を借りただけの、鬼面人を驚かすようなアートではなく、被災者の痛みを共有しながら、失われた日常生活のささやかな幸せを地道に回復していく民衆的な活動に、光を当てたい。

（かたおか・りゅう＝東北大学准教授）